

戦前・占領期を含む沖縄の平均寿命の年齢構造

－水島生命表，琉球政府生命表を用いて－

所属：国立保健医療科学院生涯健康研究部

発表者：○逢見憲一

【目的】沖縄(県)の平均寿命(0歳時平均余命)の年齢構造を、第二次大戦前および占領期までさかのぼって経時的かつ定量的に分析する。

【方法】沖縄と全国との平均寿命の差を、各々の生命表上の年齢別生存数および平均余命から年齢別寄与年数に分解した。

【資料】沖縄 戦前：水島治夫 府県別生命表 占領期：琉球政府 第1回生命表(1955年)、1960年簡易生命表、1965年簡易生命表、1975年以降：都道府県別生命表。
全国 戦前・占領期：完全生命表、1975年以降：都道府県別生命表。

【結果】1. 戦前 水島生命表による沖縄の平均寿命(1921-25年、1926-30年、1931-35年)は、男が各々46.32、45.97、47.23年、女が50.53、50.49、51.82年であった。いずれも沖縄が全国を上回っており、その差は男4.26、1.15、0.31年、女7.33、3.95、2.19年であった。しかし、平均寿命の差に大きく寄与していたのは0歳(乳児)の死亡率であり、0歳を除いた寄与はほとんどが負値であった。各時期とも男60歳以上、女40歳以上では年齢別寄与はおおむね正值であったが、幼児から青壮年では負値であった。

2. 占領期 琉球政府生命表による沖縄の平均寿命(1955, 60, 65年)は、男が66.41, 68.02, 68.91年、女が72.54, 74.65, 75.64年であった。いずれも沖縄の平均寿命が全国を上回っており、差は男2.81, 2.70, 1.17年、女4.79, 4.46, 2.72年であった。0歳の寄与はやはり大きかったが、0歳を除いた寄与も今度はすべて正值であった。年齢別寄与は戦前と同様に、幼児から青壮年は負値、中高年以降は正值であった。

3. 1975年以降 1975～95年は男女とも沖縄の平均寿命が全国を上回っていたが、男は2000年以降全国を下回っていた。0歳の寄与は、戦前・占領期とは反対に男女ともほとんどの場合負値であった。戦前および占領期と同様に、幼児から青壮年の年齢別寄与は負値、中高年以降は正值であった。

【考察】戦前・占領期・復帰後を通じて、沖縄の平均寿命は総じて全国より高かったが、戦前および占領期には0歳(乳児)の寄与が大きかった。この時期の沖縄の乳児・新生児死亡については、届出漏れが多く信頼できないことがすでに指摘されており、平均寿命が長いことを“自明の前提”とする現在の沖縄長寿研究は統計的に検証し直す必要がある。

また、幼児から中高年は負の寄与、高齢者が正の寄与を示す構造は戦前から現在まで長期的にみられており、巷間の“沖縄の現在の高齢者世代は健康で長寿だが、中高年以降の世代は不健康”という解釈も再検討する必要がある。